

スタンダールの小説における

喜劇的要素について

鳴 岩 宗 三

十九世紀初頭といえ、ちようどスタンダールが小説に筆を染める直前の時期、その頃のフランスでは、センチメンタルな告白型の小説や幽霊のよく現れるメロドラマ風の小説が広く読まれていた。

試みにいま、そうした当時の流行小説とスタンダールの小説を比較、照合してみると、誰の眼にも明白な相違点、すなわちスタンダールの文体の遙かに明晰、軽快な点と、かれの小説人物に著しい喜劇的に描かれる傾向がそこにはつきり記されている。そして当時盛んに読まれた小説という観点からすれば、スタンダールは庶民の世態、風俗を滑稽化したポール・ド・コックなどのロマン・ゲーを好んで愛読している。系譜をたどれば、従つてかれの小説は、先にあげた小説よりむしろロマン・ゲーに近く、当然また後者との類似点をより多く具えている。

スタンダールの小説にはられた喜劇的要素を考察しようとする時、先ず第一に、こうした当時の流行小説との影響関係は無視することができない。がそれと同時に、かれの作家経歴の中にはいま一つ注目されてよい重要な経験が含まれている。それが、青年時代に演

劇に没頭したかれの喜劇作家としての経験であることはいうまでもない。そしてそれ以後も、かれは間歇的にはあれ、笑いの理論を発表し、一貫してコミックの問題に強い関心を示している。結局、こうした笑いに寄せる並々な関心が、『リュシアン・ルーヴェン』の原稿余白に証しされるような、すなわち作品全体にあまねく喜劇味をもつて、読者を楽しませようという意図と密接につながる。

たとえばこの大作の原稿余白に、スタンダールは次のような自作批判を書きつけている。△読者は思う、いかにも真実だが、何と陰気なことよ。でたとえば、モリエールのように諷刺のきいたちよつとした言葉で読者を微笑させる必要がある。『タルチュフ』の満れ場で、ドリーヌはこう叫ぶ、「好き同志つたらもうあんなに夢中になつてさ」▽。つまり、読者に真の娯樂を供給しようとするれば、王政復古や七月王制下の社会的、政治的現実を忠実に活写するだけでは足りない。同時に場面をおもしろおかしく作ること、そのためには現実を諷刺的に戯画化して描く必要があるというのだ。さらにまた文体に関しても、速度と飛躍をもつた、そしてむしろ『赤

と黒』の文体に反省を加え、『リュシアン・ルーヴェン』では、ハもつと華麗なものと潤いのある、気がきいて快活な文体Vで書きたいと洩らしている。以上要するに、スタンダールは、コミックで豊かな要素を小説に導入しようと努めた。かれはそうした意図をはっきりとしかも積極的にもつていた。実際には、かれの小説にどのような笑の種類が描かれ、それはどのような特徴と意義をもつものなのか。

周知の如く、スタンダールは青年時代に数篇の喜劇を書いている。そしてこの時期のかれは、ホップスの定義に従って笑いを考察し、——すなわち笑いととは、他人と比較して、あるいは過去における自己と比較して、俄かに現在の自分が優れていると自覚される場合、その突如とした勝利の感覚から生れる、と考えつ——これを広くかれの喜劇に適用した。演劇の時期を過ぎ、以後小説を書くまで凡そ二十年のあいだ、同様にスタンダールはホップス説を踏襲し続ける。従って当然、かれの小説に描かれた喜劇の場面にも、この解釈が色濃く反映するわけであつて、事実、その多くをホップス説によつて適切、妥当に説明することも恐らく不可能ではない。

だが、この他に對して自己が俄かに抱く優越意識とは、よく考えてみると、笑いの直接的動機に迫つたというより、むしろコミックなものの人間心理にもたらす効果やその反動の解明でしかありえない。換言すると、ホップス説は、あくまで滑稽な対象からうける笑いの心理を巧みに分析、解釈したものにすぎない。従つてそれは、一休われ／＼がいかなる対象におかしみを覚えるのか、という積極的な設問に決して応じえない。では実際に、われ／＼は具体的に何を笑うのか。この問いに答えて、ベルグソンは、人間の機械的

こわばりが悉く滑稽の対象になると提言しつつ、笑いを形、言葉、情況、性格などのおかしみに分類している。

このベルグソン説は、ホップスの心理的解釈ともより対立的であり、後者を祖述したスタンダールの場合に、それが必ずしも適切妥当というわけではありえない。だがそれでもなお、かれの定立した笑いの分類は、問題処理の上で一つの優れた指針たることをやめない。そこでわたくしは一応、ベルグソンの分類に従い、その中から先ずスタンダールの小説を特色づけるおかしみ、すなわちオートマチックな言動と身振りのおかしみ、及び言葉と情況のおかしみを選び、さらに形のおかしみ中に小分けされた内容より形式の尊重をも、諷刺の一つの代表的な型として（かれの社会諷刺を特別に取扱わぬ代りに）とりあげよう。これらのほかにベルグソンの考察から除外されている生理的のおかしみとユーモラスな笑いを、それぞれ至当な理由から補つて、これより順次考察を進めてみたいと思う。

(1) オーマチックな言動と身振りのおかしみ、及び生理的のおかしみ

『赤と黒』の中に、妻の姦通という予期せぬ重大問題に直面して、レナール氏が嫉妬、懊惱のあげく、ふといつもの習慣から妻に相談しなくてはと思う場面がある。これはもちろん人間のオートマチックな言動に注目した例。別に『リュシアン・ルーヴェン』には、小説の主人公が馬を買う目的で知事に面会し、知事の気取った挙止の一つ一つに細かく注意をそぐられる場面がある。これはまた、身振りのおかしみを微細に描き分けた例。

右の例にみる如く、人物のオートマチックな言動や身振りのおかしみを観察、記述した例が、スタンダールの小説に若干存在しているということは真実である。しかしそれらは、あくまで僅少の例に留まり、むしろ例外的である。この点を一層明瞭にするために、いま『リュシアン・ルーヴェン』より、主人公リュシアンが、未知の美しい婦人の面前で、こともあろうに二度も落馬するその滑稽な二つの場面を引用してみよう。

(i) リュシアンがこういう失礼な考えに耽つてしていると、その緑の鎧戸がすこしひらき加減になった。それは、うら若くすばらしいブロード髪、蔑むような様子をした女だった。……若い婦人は窓を閉め、縫取りのあるモスリンの窓掛になかば身をひそめて眺めた。二十四、五かと思われた。リュシアンはそのまなざしに一種風変りな表情を認めた。……

突然リュシアンの属していた第二中隊が再び行進をはじめた。リュシアンは緑の鎧戸を見つめながら、馬に拍車をひと突きあてた。馬は足を滑らせて倒れ、リュシアンをふり落した。

立ちあがって、サーベルの鞘で馬にひと鞭くれ、鞍にとび乗る、実際それは一瞬のことだった。しかし烈しい哄笑が一斉に起った。かれはすでに馬に乗りなおしていた。が目をやると、灰色がかったブロードの婦人は相変らず薄笑いを浮べていた。(Pictage I, p. 734)

(ii) ある日の午後、鎧戸がひらいていた。縫取りのあるモスリンのかわいゝ窓掛がリュシアンの目にはいつた。すぐさま、殆んど無意識にかかれは馬を気取らせようとした。……馬はひどくいきり立ち、妙な恰好をしてとび跳ねたので、二三度リュシアンはあや

うく落馬しかけた。

(畜生、また同じところで) とかれは腹立たしさに紅潮しながら呟いた。しかもその上、一番危くなったときに小さな窓掛が窓際ですこしひらかれた。だれか見ていることは確かだった。実際それはシャステレル夫人だった。……

とうとうハンガリー産の小馬は、聯隊の到着した日に落馬した場所から約十歩ばかりのところで、リュシアンをふり落した。かれはこの上もなく烈しい屈辱をおぼえた。(P. I, p. 835)

さて右の例(i)において、落馬の場面描写が馬からふり落されて再び馬にとび乗る実に敏速な主人公の動作の記述にしばられているということ、この点が先ず注意を惹く。もう少し言葉を補ってみると、一般にこうした場面をコミックに設定しようとするれば、落馬前後の主人公の滑稽な仕草にアクセントを置き、そこを詳細に描くことが要請される。ところがスタンダールでは、肝心肝要のそうしたコミックな状態の描写が容赦なく削ぎ落されているのだ。これに対し例(ii)には一箇所、奇妙な恰好で馬がとび跳ねる滑稽な場面描写がみられる。だがこの点を除くと、例(i)にもまして落馬の場面描写は簡潔となり、作者はむしろ、二度の落馬にこだわる主人公の心理を写すことに終始している。それ故、この場面からリュシアンのシャステレル夫人に対する微妙な感情の動きを除去すれば、おかしみの半ばが減殺されるおそれすらある。このように、スタンダールは一般的にみて、動作や身振りの描写をごく簡潔にし、多くの場合むしろ、人物の心理描写によっておかしみを浮き出させる。この意味で恐らくかれの小説を、人間のオートマチックな言動や身振りを刻明に描写し、無遠慮な笑いを読者に押しつけるブルーストの小説

と比較、対照することは、極めて興味ふかく示唆的であろう。

だが実際に人を笑わせようとすれば、どうしても人物の具体的な身振りや言葉をそえ、しかもそれらを詳細、明瞭に描くことが不可欠である。このおかしみの特性をスタンダール自身、理論的にはもちろん充分認識していたようである。そのことを一八二三年の笑いの考察の中で、かれははっきり述べている。とすれば、何故にかれは、この理論的に至当なプランを、実際、作品を制作する時になつて放棄したのであらうか。

この疑問はさらに次のもう一つの疑問と絡み合う。すなわち先にあげた簡潔な落馬の場面は、不思議にも読者の記憶に残りに残っている、それは何故かという疑問と。後の問題より考えてみると、これは要するに、スタンダールの場合、人物心理を通しておかしみを描くということは真実だが、問題は決してそれだけではない。むしろそのかれが、人物の動作の記述や情況描写を必要に応じ、適切に行っている、しかもその直截簡明な筆致は、ごたごたと詳しく説明するより、かえって鮮明な印象を刻みやすいということだと思われる。

さらに簡潔な描き方は、行間で多くを語る。この行間に残された自由な想像を馳せる余地こそ、冗長な説明、描写より遙かに読者を樂しませる。当時の作家としては稀にみる洞察の鋭さをもつて、スタンダールはこうした読者心理を透視していた。恐らくさきのプラン放棄の問題も、それを解く最も重要な鍵はここに提供されている、とわたしは思う。

次にベルグソンの分類からは逸れるけれども、スタンダールが殊さらにとりあげた生理的おかしみについて、こゝで一言ふれてみた

い誘惑を感じる。この種のおかしみは、主にこわがり屋という人物型を通じて描かれ、その一例は、『リュシアン・ルーヴェン』のデュ・ポアリエ医師や『パルムの僧院』のエルネスト四世の場合にみられる。

ところで、このおかしみの型は作者自身の言葉によれば、ホップス流の考えにそつて論理的、理詰めに組立てられている。試みにエルネスト四世の場合を例にとつて、この点を敷衍してみると、先ず最初、大公はイタリヤ統一の野望を抱く聡明な立憲君主として現われる。だがその実、かれは夜ともなれば、僅かの物音にも怯えおのゝき、全身ものものしく武装した警察大臣と一緒に、室内を限なく見廻らずにはいられない。昼間あればど峻厳、尊大な大公、その同じ人物が毎夜かくも滑稽な言動に身を委ねている。このニユースは先ず聞き手に不意打ちをくらわせる。がそれと同時にひそかに聞き手の自尊心をもくすぐり、自然かれに、自分だつたらという優越意識を確証させずにおかない。

普通スタンダールは、人物の精神的悩みを描く時でも、その悩みを合理的に裏付ける生理的理由を用意している、とよく言われる。が多くの場合、かれはそうした生理的、肉体的問題を暗示的、控え目に描くのが常である。コミックな問題においても、事情はこれとほぼ同じで、かれはなるべく露骨で卑猥な素材を避けようと努める。約言すれば、エルネスト四世の例にみる如く、スタンダールの場合、生理的おかしみとはいっても、それは決して人間の身体や生理を滑稽の対象にした卑猥な笑いでないわけだ。そしてこうした傾向は、その意図した笑いがすべて、知的、高級だというかれの笑いの共通性格とも、もちろん無関係であらうはずがない。

以上の如く、スタンダールの小説において、無遠慮な哄笑や露骨で猥雑な笑いは描かれることが極めて稀である。この事実は、一見かれの小説に何の意味も持たぬかに見える。だがいまだ少し周到に読めば、実にそれは、かれの小説内容や小説技法と密接不離の關係にあることが知れる。すなわちスタンダールは、小説の部分的制作においてもつねに作品全体のトーンによく留意した作家である。たとえばかれは、高まつた女の情熱を描く時にはイタリヤ音楽を、また恋人たちの幸福な散策を描く時にはモツアルトの音楽を、それ／＼その場の雰囲気に適わしいように導き入れる。このように感動的で上品な雰囲気へ *grace* な笑いや *charm* な笑いをもち込めば、明かに作品全体のトーンは掻き乱されてしまう。こうした認識の上にたつて、かれはあえて右のような笑いを描こうとしなかった、と考えるのがかれのエステチックに最もよく即しているように思われる。

(2) 内容より形式の尊重

スタンダールの小説には、内容や実質より形式や肩書を尊重しようとする人間心理の盲点を鋭くついた例が、ずい分沢山ある。殊に肩書や勲章をありがたがる人物は名をつらねて多数登場している。たとえば、オーストリヤ政府への密告書を口述するたびに、帝国の大礼服に着換えるデル・ドンゴ侯爵の例。また、敍勲のためには結婚も国外生活もい／＼諾々と受入れるあわれな勲章マニヤのサンセヴェリナ公爵の例など。

同様にして、自分の権威や地位を笠に着る人物も、容赦のない筆致で辛辣に諷刺される。『リュシアン・ルーヴェン』のヴェーズ伯

もこの鋭鋒をくらったうちの一人、すなわち知事の集まるかれの晩餐に誤つて招待された画家に、伯爵夫人が同情を示すと、かれは見えを切り、冷然と云ふ「大臣の晩餐を悪く言うものがあるか」云々と答えている。だが、この点でさらに一層滑稽に思われるのは、大臣になりたがっているグランデ氏の場合である。次に引くのは、そのかれと妻のあいだの会話、二人はいまりュシアンの地位について論じている。

「息子さんの肩書についてはルーヴェンさんがお決めになさいますよ。議會のことがあるので、息子さんはヴェーズさんの許でのいまの立場と同じように、一介の秘書に留りながら、事務長の仕事を一切お引受けになるのがいいと思います。」

「そういう駆引きをわしは好かん。公正な行政なら、当然各自の職務にふさわしい肩書をもつべきじゃないか。」(P. 112)

ここにおけるグランデ氏は、まさしく、一たん権威にありつくと、忽ち頑固な形式主義者に変身する愚鈍な人間の典型的な一例といえる。

さて以上のように形式をありがたがる人間は跡をたゞない。その限りに於いて、また一方では、そうした人間の弱点につけ入り、形式や肩書を政治や社交上の武器として巧みに利用するかしい人物も、当然存在するわけだ。『リュシアン・ルーヴェン』のデュ・ポアリエ医師やルーヴェン氏など、先ずこの選ばれた人物群の中に数え入れられる。がこうした意味合いでは、次に引くサンセヴェリナ公爵夫人の場合こそ、形式の何たるかを最もよく弁え、その価値を最高度に利用することを心得た人間の適例といえよう。

公爵夫人はランドリアニ殿下には、この善良な町人出身の人をよろこばせそうなれなれしきで書いた。たゞ署名だけは三行にわたっていた。非常に親しみをみせた手紙の末尾に——アンジェリナ・コルネリア・アイゾタ・ヴァルセラ・デル・ドンゴ・サンセヴェリナ公爵夫人。

(こんなにくさん書きならべたのはあの気の毒な公爵との結婚契約書以来はじめてだわ) と、夫人は笑いながら思った。(でも、あゝいう人たちはあやつるのはこういうことにかぎるんだもの。町人階級の人たちには戯画が美しく見えるのだ)。(P. I, p. 253)

ところで、こゝに滑稽化された愚劣な形式主義者や時代錯誤型の人物は、大ブルジョワ、大臣、上流貴族などであり、例外なく社会的上層に位置している。そのうち、大部の者は直接政治にたずさわっている。このように社会的身分の高い人物や重要な地位にある政治家を諷刺的に描く傾向は、スタンダールの場合、遠く青年時代の諷刺劇にまでさかのぼる。つまりかつてのかれが、社会改良という遠大な抱負をふまえて演劇を試み、従つて必然的に社会の上層階級や為政者を好んで諷刺の俎上にのせたということ、それは論理的に深くつながる。そしてまた、この点、よくしがない小市民生活を滑稽化し戯画化して描いたバルザックやフローベールの小説と比較してみれば、上に指摘した傾向は、明かにスタンダールの諷刺における顕著な特徴だといつても、恐らく異論のあろうはずがない。

(3) 言葉のおかしみ

『リュシアン・ルーヴェン』に登場する人物で、いさゝかおめでたいサンレアル侯爵は、人前で才智を銜う時、きまつてルイ・フィリップを『泥棒』呼ばわりする。いうまでもなく、これは同じ言葉の機械的な繰返しに注目した例である。

別にまたこの小説には、『怒れるブルドッグの愛嬌を漂わせたデュ・ポアリエ医師』や、『有利な借地契約を更新した大地主のように全く尊大な顔付きをした代議士』などにみる如く、人間と他の動植物の類似をついた比喻によるおかしみの例も若干描かれている。

このように言葉のおかしみには、同じ言葉の繰返しや比喻によるおかしみ、さらには地口や語呂合せの如く言葉の遊戲に類するおかしみがある。スタンダールの小説においても、もとよりそれらの具体例が例外的に存在するということは否定できない。だが、それらはすべて平凡な例であり、かれの小説では凡そ影のうすい存在ではない。

これに比べると、かれの小説をはなやかに色彩するエスプリや機智に溢れた会話は、単に量的に多いというだけでなく、小説に対する価値や意義の上からみても、まことに重要なものをはらんでいる。

殊にこの点で、才人・才媛の競つて登場する『リュシアン・ルーヴェン』は、最も豊富な実例を提供している。試みにいま饒舌の才人ルーヴェン氏に関して、かれの生々した才智の一端を示す言葉を左に列挙してみよう。

(i) 《Un fils est un créancier donné par la nature.》(P. I, p. 763)

(ii) 《Siste viator ! Ici Lucien Leuwen, républicain, qui pendant deux années fit une guerre soutenue aux cigares et aux boîtes

neuves.》(P. I, p. 768)

(iii) — Il (Lucien) s'est déclaré l'ennemi du marchand de papier du ministère et veut des lettres en dix lignes (P. I, p. 1390)

(iv) — mon éloquence et ma réputation sont comme une omelette soufflée ; un ouvrier grossier trouve que c'est viande creuse. (P. I, p. 1311)

最初の例は、息子を債権者に譬えたあまりにも有名な言葉。第二の例は、息子のために選んだ墓碑銘に、葉巻と新調長靴の愛好者だったことを刻む。また第三の例は、仕事熱心な息子を文房具店のお得意だと揶揄、最後に第四の例は、自分の評判を茶化して、体裁がよくて滋養分に乏しい御馳走に譬えている。

さて、機智の横溢した右のような言葉は、スタンダールの小説では特別に重要な役割を担っている。この指摘をあらためて繰返すのも、『リュシアン・ルーヴェン』において、実に諧謔や才智に富んだ会話が、これまでかれの小説にほとんど認められなかった斬新な要素を、初めて豊かに導入する役割をつとめているからである。その新しい要素とはすなわち、この小説全体に漂う軽快で陽気な雰囲気であって、しかもまた、この新しいトーンこそ、スタンダールの独創的な文学観に照応するものである。

かれの文学観の変遷をこゝで詳しく説く余裕はないが、とにかく、喜劇から小説に移行する過程で、徐々にかれの新しい文学観が形作られ、つぎまるところ、それは『イタリヤ絵画史』に展開された例の現代理想美論となつて結実する。この理想美論の中では、現代美が具えるべき必須の条件として、七つの特性が押し出されている。

そのうち、こゝでは次の二つの特性、《この上なく生々した才智》と《多くの gaieté》が特に注意を惹く。というのも、喜劇を試みた頃のかれは、gaieté をほど重要視することなく、専らコミック中心に人物構想を練つていたからである。こうしたコミック中心の人物構想は、もちろん現代理想美論を契機として、かれの念頭より離れ、それに代つて、かれの文学的関心は、新たに人物の快活さや陽気さに向ひ集中的に注がれ始める。スタンダールの文学観の変遷と進化を図式的にとらえてみると、凡そ以上の如くなる。

ところで、この新しい芸術観に立脚してかれの小説を考察すると『リュシアン・ルーヴェン』の前作『赤と黒』はその実現にほど遠いと言わねばならない。ちようど、その客観的な人物造形法がむしろ十七世紀の性格喜劇に近いのと同様、人物対話も極めて簡潔であつて、依然として性格喜劇的な痕跡を強くとどめている。これに対して、『リュシアン・ルーヴェン』に進むと、そこに初めて、これまで閉じこめられていた堅牢な写実主義の枠を突き破る人物が出現する。この間の事情は、あたかもモリエールの後に現れて、才智を縦横に駆使する *fantasie* 型の人物を登場させたルニャールのそれと甚だよく似通つている。そして、ルニャールの劇中人物がその才智によつて舞台上に *bagatelle* を横溢させたのと同様、これに全く照応する如く、老快樂主義者ルーヴェン氏も、その軽妙な饒舌を通して、小説全篇に喜歌劇風のトーンを醸し出させる。

要するに、スタンダールの新しい芸術観に合致する軽快なトーンは、ルーヴェン氏の如き陽気な *fantasie* 型の人物の出現を待つて初めて淀みなく流れ始める。しかも同時に、こうした *fantasie* 型の人物の出現は、それ以後のスタンダールの小説に大なり小なりの

影響を及ぼし、かれの小説の方向をいくらかは規定せずにはおかない。ついでに言えば、この事実は、晩年の作に進むに従い、辛辣で諷刺的な笑いが和げられてくるという、かれの小説に認められる一般的な傾斜と、もちろんそうそくしている。

(4) 情況のおかしみ

普通、情況のおかしみと呼ばれているものの中には、さまざまな型が存在している。たとえば、幾多の情況の錯綜、積み重ねが笑いを生む場合もあれば、言動の論理的矛盾が笑いを誘う場合もある。一方、相手の言動を取違えて思わぬ結果を招く、いわゆるキブロコの例も、このおかしみの中に分類される。また、特定の目的や利益のために相手の人間を騙そうとする場合もある。この時、人はつねに欺かれた者を笑う。さらに、期待が突如無に帰する期待はずれの例もよく滑稽の対象になる。

綿密に読むと、スタンダールの小説には、もとよりこうしたいろいろな情況のおかしみに照応する例がいくつも見当る。そして、その中にはまた、甚だ精彩のある場合を含むことだってしばしばある。予めこの点を充分認識しつつ、こゝでは便宜的に、最も頻度数の多い騙し合いのケースと期待はずれの例に、考察の範囲をしばらくたいと思う。

古来フランス文学では、相手の狡智に翻弄された滑稽な人間の典型として、広く *fool* の例が引合いに出される。このひそみにならって、『赤と黒』の作者も、妻の巧みな防禦姿勢に眩惑されたレナール氏や、かしい妻に操られたグランデ氏の愚劣さや滑稽さを描いたものゝようである。もつとも、作者の筆は、レナール氏の懊悩

に關してはいくぶん同情的である。これに反し、妻の貞操を形にして大臣の椅子に坐ろうとあがくグランデ氏の滑稽さは、成上り者に對する戯画として、まさしく作者の好餌になっている。

愚鈍な夫を大臣の地位にすえるためには、ルーヴェン氏の息子を幸福にしてやらねばならない。この際どの画策には、もちろん事前
に夫の承諾がある。そこで頭のよいグランデ夫人は、巧みに夫の虚栄心を煽り立てつゝ、婉曲に話をもつていつて、夫から次のような言質をえる。

「おまえの評判は非常によい。二十六才でしかもとび切り別嬪でいながら、おまえの素行には非のうちどころがなかった。……だから、貞淑に背かぬ、いやさらに名誉を損わぬ範囲内で、わしの一家に役立つことは何でも、自由にどしどしやつていいわけだ。」

(P. I, p. 1344)

こゝで一応、グランデ夫人は暗に女の操と評判に敏感な風を装う。がすぐまた、この無神経な夫の発言に乗じて、

「考えてもごらんないまし、大臣さま、あなたの同意なされようとする契約がどんなものか……あなたが大臣になられて初め三月、リュシアンさんに親しくするのでしたら、二年間は親しくしなければなりませんわ、たといルーヴェンさんが議会の信望を失うにしても……。」(P. I, p. 1344)

結局、こうしてかの女は、夫にリュシアンと二年続けて親しくするという契約に同意させるのだ。

スタンダールの小説人物においては、各自の幸福追求の過程で、相互の利害が対立し、互いに自己の利害のために、相手の裏をかこうとする場合がしばしば起っている。しかも、こうした人物相互の摩擦、

軋れきを、スタンダールは、時代の流れにそつて、いわば象徴的に、持てる者と持たざる者の抗争意識の下に描き出す場合が多い。この意味では『赤と黒』の冒頭、家庭教師ジュリアンに対する支給額を廻つて、レナール氏とソレル爺が争うかけ引きの模様は最も辛辣である。

「そうしますと、あと一つだけ話を決めればよろしいわけで、あれに下さるお金の高を。」

「何だつて！」とレナール氏は腹立たしく叫んだ。「昨日から話はきまつているじゃないか。三百フランあげる。それでたくさん、いやたくさんすぎると思つているくらいだ。」

「そりやあなたの言い値ですよ。……（実は）よそにもつといふ口がありますからな」……たゞの一言も不用意には口にされぬすきのない会話を交えたあげく、百姓の狡猾さは、生きるためにそれが必要とせぬ富者の狡猾さに打勝つた。……

「よろしい！三十五フランわたすことにしよう」とレナール氏はいった。

「きつちりしたに金高なるように、町長さまのようにお金があつて、気前のよいお方は」と百姓は猫なで声でいった。「三十六フランまで奮発していただきますでしょうな。」(P. I, pp. 236-237)

次には、期待が突然無に帰する時に生じる笑いについて考察してみよう。この場合の最も適切な例証、恐らくそれは、次に早速引く『リュシアン・ルーヴェン』におけるデヴェルロアの味った失望であらう。

晩餐の席でリュシアンは友人のエルネスト・デヴェルロアに会つた。かれはひどく浮かぬ顔をしていた。例のアカデミー会員は、

デヴェルロアの政治科学アカデミー立候補に四票を引きうけると言つていたのに、ヴィジー温泉で死んでしまつた。これを手厚く葬つてみて、エルネストは厄介な介抱で四カ月も無駄にしたうえ、笑ひものになつてしまつたことに気付いた。「なにしろ、出世はしなくちゃいかんからな」とかれはいうのだつた。「よし、これからは万一学士院会員に取り入れるにしても、一番丈夫なやつに決めるよ。」(P. I, p. 116)

結果的に四カ月も無駄骨を折つた右のデヴェルロアの事例、それとおかしみのニュアンスは多少異なるが、『パルムの僧院』の次の二つの例も、やはり期待はずれによるおかしみの中に含み入れてよいであらう。

その一つは、すでに牢獄に死体となつて横たわるファブリスを胸に描くファビオ・コンチの耳に、かれの期待をあざ笑う如く、生々としたファブリスの肉声がとびこんでくる場面。

また他の一つはファブリス逮捕の報知をうけて、サンセヴェリナ公爵夫人が昂然と暇乞いを告げに、エルネスト四世を深夜訪問する場面である。この時の大公は、公爵夫人が甥の助命嘆願に駆けつけたことゝ早合点し、かの女の高慢ちきな鼻を折るべくこゝに訪れた好機を、いかに利用しようかとさまたざまな想像を楽しんでいる。で、旅装を整えた公爵夫人の姿は、かれにとつてまさしく青天のへきれき。しばらくは啞然として、「どうして／＼どうして／＼」と驚きの言葉を咄くばかりだ。

同じ期待はずれでも、作者の筆が作中人物の胸裡に同情的な描き方を示せば、場面はかえつて悲劇性をおびるおそれがある。しかしこゝでは、周章狼狽した大公に、作者はあくまで無関心であり、さ

らに作者は、不意打ちにさわる大公の胸中より、この精神的動搖に伴うかれの身振りに力点を置いて描いている。それ故にこそ、大公の姿は純粹に喜劇的なものとして浮かび上つたのだといえる。

以上のおかしみのほかに、スタンダールの小説では、愚劣な性格を滑稽化した例が相当見当る。性格を中心に構想された副人物たちのこうしたおかしみを、かつてかれの試みた性格喜劇との関連において考察すること、それも確かに一つの興味ある問題であろう。ただ、いまのわたしはこの点を指摘するにとどめ、これ以上それに立入るつもりはない。

(5) ユーモラスな笑い

ユーモアというものを定義しようとすれば、必ずしも容易ではない。が、くだいていえば、ニュアンスがあつて少し考えなくてはおもしろ味の分らぬ笑い、殊に普通笑いとい総称されているものの中でも、辛辣、皮肉な一面の和げられた笑い、一般にユーモアとは、そうしたものとしてうけとめられている。(もつとも、イギリス文学などの印象では、もつと庶民的な日常生活にとけこんだ笑いはユーモアと呼んでいようだが、スタンダールに、そうした日常卑近な事柄に対するセンスを要求しても空しい)。

さて一応、ユーモアを右の如く定義しておき、スタンダールの小説からユーモラスな笑いの具体例を集約してみると、先ずその一つは、些細な事柄や問題を殊さらに重大さを装つて取扱う、という定式に還元できるように思われる。こうした定式に合致する実例は相当な数に及んでいる。いまその中から適当なものを選択、提示す

ると、先ず『リュシアン・ルーヴェン』において、小説の主人公が次のようにいつて保護者のフィロトー中佐にキルシュやコニャックを献上するところ、

「じゃ伯父さん、伯父さんになつてもらつて光栄に存じます、が、こゝに尊敬すべき身寄りの者が三人訪ねて参つていますから、ご紹介したいと思ひます。それはかの三つの酒樽で、第一は黒林出のキルシュ未亡人。」

「そいつはわしが貰うとしよう。」フィロトーはからからと笑ひながらいった。……

「しかし中佐殿、いゝですか、この老未亡人は、一八一〇年産のコニャック嬢と申す妹と決して離れまいと誓いを立て、おります。」(P. I, pp. 818—819)

右の場面において、なるほどリュシアンは、大まじめな顔を装つて好演している。だがかれの表面快活な振舞いの裏には、俗物に対する烈しい侮蔑がかくされている。これに比べると、経験を積んだルーヴェン氏の演技は、さすがにそつがなく板についている。たとえば、選挙区から選挙民の依頼をどつさり背負いこんで帰り、それを妻や息子の前でこと重大らしく披露するルーヴェン氏。この時のかれには、頼み事のくだらなさを心得えつゝも、それだけに一層、依頼された事柄を珍重している風が見える。

「……有権者の一人から、出来のいゝ長靴を四足送ってくれと頼まれたよ。先ずパリの長靴屋の上手なやつから探してかゝらねばならない。趣味がよくてしかも耐久力のあるといった代物でなくてはいいかん。そういう立派な靴屋を見付けることができれば、マルパ君の古靴を直させようと思うのだ。ご丁寧にもしそれに

をもつて行つてくれと言われてね。……手紙では非頼むと言つて寄こしたのは別として、全部でことずけが五十三もあるのだよ。」

(P. I, p. 1274)

右のような例は『赤と黒』にもいくつか認められる。たとえば、最初の紹介がすんだ後すぐ、ジュリアンに向つて肌着を何枚もつていかと質問するラ・モール侯の例の如くに。だが、スタンダールの小説中、ユーモラスな笑いが最も豊富に鋳められているのは、いうまでもなく『リュシアン・ルーヴェン』である。それらは言葉のおかしみに雁行し、またそれと密接に絡み合いつゝ、この小説に漂う喜劇劇風のトーンを側面から強力に支える働きをつとめている。

同じくこの『リュシアン・ルーヴェン』には、上述の定式を逆にした、重大な問題に、快活さを装う、というケースが若干存在している。そしてそれらの実例が、息子のために煩悶を強いられた時のルーヴェン氏に集中した感のあるのも、その理由の多くは、もとより開き直つた態度や湿つた空氣の嫌いなかれの性格に尋ねられる。つまり、息子を思うかれの親心は、ちやうど息子にふりかゝつた危険思想のもち主という憂うべき風評をもみ消そうとして、息子に頭から放蕩を勧めざるをえないその例が端的に示す如く、結局 諧謔や冗談の形を通してしか現われることができないのである。

ところで、これまでのわたくしは、小説人物に関するおかしみを主人公、副人物の区別なく一括して取扱つてきた。あらためてこゝで両者を識別して考察すれば、副人物に対する笑ひには、總じてあくまで突放して描かれた辛辣で皮肉なものが多い。これに反し、主人公に関するおかしみでは、笑ひのそうした嘲笑的一面が和げられ、むしろそこに作者の強い共感を交り合つた場合がしばしば認

められる。もとより、この作者の小説人物に対する共感の投入によつて、初めてスタンダールの主人公たちの醸すあの自然らしい魅力と『*aimable*』な面影が可能となる。が実にまた、こうした主人公の描き方においてこそ、スタンダールは他の小説家と著しく異なるのだ。

周知の如く、スタンダールの小説はすべて若々しい青年を主人公としてゐる。もちろん、いかなる小説においても、経験に乏しく人生に詩的な夢と理想を抱く青年の成長過程を描こうとする限り、かれの人生経験は、いくぶんコミックな要素をはらみがちではある。がスタンダールにおいては、この傾斜が特別にはげしい。つまり、かれの主人公たちは理想主義的で人生経験に未熟な、それ故に幾度となく現実につまづかざるをえない、いわばドン・キホーテ的な人物なのである。そしてスタンダールは、主人公たちのこうしたドン・キホーテ的一面に深い愛着と共感を覚えつゝも、同時に、理想主義的性格に宿病づけられて幾度か現実と衝突するかれらの姿を揶揄しつゝ描いていく。

たとえばかれらは、美しい貴婦人に熱愛される日のことをはるかに夢みたり、新調のりりしい軍服を身につけて子供じみた遊びを抑えきれなかつたり、またくだらぬ問題に忽ち決闘を口走るかと思えば、一方、赤の他人に氣を許してやすやすと瞞されてしまう。次に引く『リュシアン・ルーヴェン』の一節も、そうした主人公の世間知らずで人生経験の未熟さを如実に物語る好例、

リュシアンは、自分の振舞ひには、なんら咎められる点がないと思つてゐた。しかし実際にはこれくらいへまなことばかりできるものではない。部屋を選択してからが失敗だった。一介の少尉が中佐の家に住むなどとはノ……ボナール氏の家の部屋

は、リュシアンの前には輕騎兵聯隊付中佐トマ・ド・ビュザン・シニール侯爵が住んでいたのだ。(P. I, p. 828)

このようにスタンダールの主人公たちの人生とは、言ってみれば、若さが織りなす悲喜混淆の絵巻であつて、その魅力と同時に滑稽な一面をはらんだけれらの若さを、スタンダールは巧みに描き分け、またそうすることによつて初めて、かれはかくも自然らしく躍動的な人物像の造形に成功したのだ、ということができる。

以上、わたくしは五つの観点にしばつて、スタンダールの小説における喜劇的要素を考察し、それによつてかれの小説の特色を把握しようとする。さて最後に、これらの考察をふまえ、一二の一般的な結論を抽出してみたいと思う。

先ずその結論の第一は、かりにいま、かれの小説を笑いの文学として規定しようとするれば、実に大きな限界につき当るといふ点である。このことは、かれのよく手本に仰いだ『ドン・キホーテ』や『トム・ジョーンズ』と比較すれば、誰にでもすぐ領かれる。すなわち、セルヴァンテスやフィールデングは、ある程度まで小説の主人公に自由行動を許容するが、裏面では、つねに一種の精神的余裕をもつて主人公を操る。従つてかれらは、冒頭から結末まで終止一貫して、主人公とのあいだの客觀的距離を堅持していく。これに対して、スタンダールは主人公を揶揄し滑稽化しようとするその半面、かれ獨特の筆致をもつて、しばしば主人公の内面深く突き入る。もちろん、この時のかれは主人公を突放して眺めるどころではない。むしろ作者は作中人物と積極的に融合、合体している。たとえば、かれの主人公が卑俗な時代や社会に対して、烈しい憎しみをあらわにする場合、それはそのまゝ、かれの時代や社会に対する敵意

のあらわれなのだ。このように、スタンダールの小説人物に接する態度は、時と場合に応じ、左右に大きく揺れる。そして、こうした作者における気分的むらは、必然的に小説全体のトーンにも影響し、結局それは、笑いの文学として必須の終始変らぬ喜劇的雰囲気構成を不可能にするのである。

次に、スタンダールの主人公たちが、これまでふれてきたように、多かれ少かれ喜劇的に描かれているということは真実である。だが、かれらは本質的にはむしろ非妥協的で孤独な人間であり、その多くは最後には悲劇へと導かれる。つまりもつと端的にいえば、かれらは悲喜劇型の人物なのである。そうした悲劇をうちにはらんだ人物は、どんなに喜劇的に描かれるにしても、純粹に喜劇的な人物となることは先ずありえない。反対にかえつて、かれらの悲劇性が一層深められるのが普通である。スタンダールがはたしてそこまで審美的効果を狙つて描いたかどうかというむづかしい問題に立入るつもりはないが、とにかく結果的にみれば、明かにこの指摘は、かれの場合にも、極めて至当なのである。

註一 Molière, Shakespeare, la Comédie et le Rire (Divan) p. 290
2° 3 R. Douz; Le Comique dans l'oeuvre de Marcel Proust pp. 25—27を参照